



シニア・アドバイザー ロバート・バックマン博士
米国立衛生研究所・国立神経疾患・脳卒中研究所アソシエイトディレクター

2007年9月3日（月）

沖縄科学技術研究基盤整備機構創立2周年記念式典におけるスピーチ

このたび、沖縄科学技術大学院大学（仮称）創設に向けて、理事・事務局長として機構に迎え入れられたことを大変嬉しく、また誇りに思います。この大学院大学設立構想は日本にとって、また世界の科学界にとって重要なプロジェクトです。

大学院大学創設というこのような先駆的努力を陰から支えるにあたり、私のこれまでの経験はきっとお役に立てることでしょう。私は米国ハーバード大学で博士号（化学）を取得後、同大学医学部神経生物学科に移り、教授に就任いたしました。主な研究テーマは神経細胞間の情報伝達で、のちに同大学の神経科学研究科（博士課程）の研究科長を務めました。

その後、メリーランド州ベセスダにある米国立衛生研究所（NIH）の国立神経疾患・脳卒中研究所の上級研究管理者の職を引き受けることになり、ハーバード大学を離れました。国立神経疾患・脳卒中研究所は、NIHの数ある研究所の中で

も6番目に大きいものです。ここで新技術の導入や、基礎科学および神経疾患に対する新しい治療法の開発に必要な共有リソースの構築など、様々な取り組みを指揮しました。

ここ数年は、研究所や省庁の垣根を越えた、科学分野の新たな学際的取り組みに力を注いでいます。具体的には、神経科学の研究を行うNIHの16の研究所とセンターを一堂に集めた「神経科学の青写真」構想を実行に移し、神経科学に関する予算、知見を結集することでより複雑な研究問題に取り組めるよう、共同議長として奔走しました。また、国防総省や国土安全保障省、その他いくつかの連邦政府機関との協力のもと、化学兵器の脅威に対抗するための研究ネットワークを指揮しました。このほか、生涯にわたって技術移転と知的財産の管理に関心を持ち続けてきた私は、NIHの技術移転利益グループの共同議長も務めました。

私の日本との出会いは個人的なものでした。実は私の妻、Hidemiは日本人です。彼女は自分自身のキャリアを持っているにも関わらず、私が大学院生の頃から重要なサポートをし続けてくれています。妻のおかげで日本への理解と感謝の念も覚えるようになりました。日本ではこれまで科学の分野で働いた経験がいくつかあります。かつて東京医科歯科大学と札幌医科大学で客員講師として英語で授業をおこなった経験があるほか、日米科学技術協力事業として実施された脳に関する共同研究（2000年開始）では米国側の協力体制を構築し、また、日本企業との共同事業にも橋渡し役として携わってきました。

以上述べてきましたように、私のこれまでの経験は沖縄科学技術大学院大学創設という新しいプロジェクトに挑むにあたり、大いに役立つことでしょう。今回沖縄に来ることを決心した背景にはこれまで成し遂げられてきた多くの成果があります。プロジェクト発足当初、ボードオブガバナーズには重要な指針を打ち出していただきましたし、ブレナー理事長にはアイデアにすぎなかったものを具現化するという素晴らしい仕事を成し遂げていただいております。国の内外から集まった代表研究者と研究者たち、施設整備、集中研修コースやワークショップなど、この2年間で機構は着実に前進しており、これは驚くべきことです。また、これらの活動は大学院大学の必要不可欠な基礎となります。強調したいのはこれ

らの実績抜きには世界最高水準の大学院プログラムの設立は語れないということです。今まさにプロジェクト達成に向けて活動の裾野を広げていくべき時です。来年の機構発足3周年で皆様に新たな成果をご報告できることを楽しみにしております。これまでの成果を支えてくれた日本人スタッフも忘れてはなりません。彼らの業績、そして大学院大学創設というこのような類を見ないプロジェクトを遂行するのに必要な、物事を変革し、新たなやり方に順応する彼らの能力も大いに評価に値します。

OISTの目標は世界一の自然科学系の大学院大学となることですが、このことはOISTが恩納村一、そして沖縄一となることでもあります。OISTは沖縄という地域社会に貢献できる一員でなければ国際社会に寄与することもないでしょう。OISTは大学機能のあらゆる面において地元との協力体制を構築しなければならず、私はこのことが達成されるよう尽力を惜しまないつもりです。

最後になりますが、私はとても冒険が好きということを申し上げておきます。OISTは素晴らしい冒険となるでしょう。本日ここにこうして皆様と同じ会場にいられることを幸せに思います。有り難うございました。



仲井眞知事とバックマン夫人